
理由がない悪意のクエスト。

オシノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

理由がない悪意のクエスト。

【Nコード】

N2565Z

【作者名】

オシノ

【あらすじ】

生活に困った冒険者。つまり僕のことなんだがお金欲しさについて、身の丈に合わない仕事を請け負ってしまった。スライムにトロール。マッドサイエンティストが造った【キラーマシン】、拳句の果てにはベテランの冒険者、あまつさえ王家に選ばれた勇者でさえも手を出さない魔女とまでやりあうことになってしまう。一緒に戦ってくれる仲間もいなければ、友達もない。孤立無援の貧乏人が、レベル不相応のクエストに挑む冒険ファンタジー。

・冒険のはじまり

+++

お金がない。

安定した収入もない。

人望もない。

恋人もいない。

このままでは、魔王を倒す戦士としてやっていけるかの自信もない。

いや、自信が無いのなら取り戻せばいいのだが、問題はそんな簡単なモノではなかった。

この先冒険者としてやっていく展望がなかなか見えないからだ。要するに、今現在のこの職業に一抹の不安を持っている。

考えてみれば三年前。

「僕は、世界一の冒険者になる」と言って実家を飛び出さしたは良いが、現実はそのなりに甘くなかった。

勇者一族の血統を引く人間なら、王家から経済的な支援を受けられるし、なにか他の冒険者が持つてないような特技（例えば魔法）を持つていればギルドからスカウトがきて仕事に困ることもない。のだが、僕はサラブレッドでもなければ他人より秀でた特技もない。

国からの支援も無ければ、ギルドに頼ることもできない。冒険者という人生に僕は完全に行き詰っていた。

しかし、食べていくためにはモンスターや賞金首を倒してお金を稼がなければならぬ。

今住んでいる部屋の家賃は二カ月滞納しているし、水も止められた。

僕は情報を集めるために酒場に来た。酒場のいつかには情報幹旋所がある。

そこには、この地域一帯の情報が集まってくる。

賞金首や、倒すとお金がもらえるモンスター。新しいダンジョンが近場で発見されればそれを教えてもらうこともある。

酒場の端っこにあるカウンター。そこはお酒を飲む場所とは別の場所にある。

カウンターは、一人がけの椅子に狭いテーブルがあるだけ。

そこには、何年もこの仕事を続けているのであろう、手と顔に長い時間を物語るシワが深く刻まれたバアさんが座っている。

「仕事の情報を貰いにきたよ。バアさん」

「おお、また来たのかい。ご苦労さんなことだね」

お互い名前を知らない。それくらいの薄っぺらな関係なのだ。仕事の情報を聞ければ僕はそれでかまわないと思っっている。

「それでどうだい、なにか良い仕事はあったかな？」

「良い仕事はみんなギルドに持ってかれちまってるよ。場末のこんな所に回ってくる依頼はどうしようもない下らないものか、ギルドや勇者でも手に負えないようなドギツイ仕事だけさ」

そんな仕事はやりたくない。

けど、食べていくためにはやるしかない。お金がないのだ、仕事を選べる立場ではない。

「死なない程度に、レベル3の冒険者でもこなせるような簡単なクエストをお願いします」

「うーん、レベル3ねえ。今は初心者にちょっときびしいような仕事しかないねえ。アンタ特技はなんだい？」

「……特にありません」

自分に自信が無かったので小声でささやくように言うと、

「なんだって？聞こえないよ！」年寄りの耳には聞こえなかったらしく聞き返された。

「うーん、特にないんだけど、しいて言えば孤独に耐える能力が高いですかね」

聞こえるように少し大きめなけで言いなおした。

「……使えないねえ。今の時代は人より秀でたものが一つ二つ、いや三つ程ないとやっていけないよ。だいたい孤独に耐えるって仲間がいなくてもいいだけだ。それじゃあウィークポイントだよ」

「……」

言われてみればバアさんの言うとおりだ。

・酒場から自警団までの道のり

「今はアンタみたいな低レベルの戦士が単独でこなせるようなクエストはないね」

「そこを何とかお願いします」

手を合わせ、まるで神様を拜むようにバアさんに手を合わせる。

「そんなコト言われたってないものはないよ。自殺志願者だったら別だけどね」

死にたくはない。だがこのまま仕事をしなかったら餓死してしまう。

状況的には、引くに引けない。

まるで前門の虎、後門の狼。

「畜生……。僕はどうしたらいいんだ」

「そんなに困っているなら借金でもしたらどうだい？」

何を言っているんだこのバアさんは。ギルドにも属していないこんな低レベルのただの戦士に金を貸してくれる金融業者なんて、何処にあるだろうか。

あるわけがない。僕が金貸しだったら絶対に貸さない。

「借してくれる所なんてありませんよ。あー、僕にまだ目覚めぬ、眠れる力とかが宿っていればいいんだけどなあ。その力は強力な魔法で、ドラゴンでも一撃で倒せるみたいだ」

「何言ってるんだい。人生はそんなに甘くないよ。そんなモノあるわけないだろ」

軽く怒られた。夢も希望もない人生だ。

「まあ、そんな話しはどうでもいいんですけど、ちょっと無理目の依頼でもいいんで、何かないですかね？」

「ないよ。また違う日に来な」

おそらくもう僕の相手をしたくないのだから、少し機嫌が悪くなってきた。

「そんなこと言って、良い依頼を隠してるんじゃないの？」
バアさんに食い下がる。

「しつこい！」

怒鳴られた。怒らせてしまったようだ。

これ以上機嫌を損ねたら、依頼を斡旋してもらえなくなる。

僕はこれからの付き合いを考えて酒場を出ることにした。

「町の近くにいるスライムや、吸血コウモリを倒しても金にならないしなあ」

町の自警団に属していれば、迷惑モンスターを倒した場合に討伐料が出るのだが、僕が勝手にモンスターを退治しても何もでない。

骨折り損のくたびれもうけだ。

くたびれるどころか死ぬ危険性まである。

なんとか日銭を稼げる方法を考えるけど思いつかない。

人間、地道に働かなくてはいけない。

けれども今の状況の僕では、それをすることもできないのか

まあ、何でもいいからできる仕事を探すか。

この際、モンスター退治やダンジョン探索の仕事じゃなくても良いんだ。

道具屋や武器屋でも、この際ゴミ掃除やパン屋でもいい。

生きるために働く。

僕は、町の入り口の近くにある自警団の建物へ歩いていく。

自警団は町をモンスターや盗賊から守るだけでなく、町の治安を守ったり、落とし物を探したりしてくれる。

道に迷った時なんかは場所を教えてくださいたりもするのだ。

僕はその建物の入り口に立っていた人物に声をかける。

「すみません。ちょっと職業安定所までの道を教えてもらいたいですけど」

職業安定所とは、仕事がない人に働く環境を提供してくれる場所のことであった。

・自警団にて

入り口に立っていた人が道案内担当の人を呼びに行く。
椅子があつたので、座って待つてると目の前に賞金首の張り紙があつた。

・狂つた科学者の操る【キラーマシン】
研究所を自らがつつたマシンで全て破壊した科学者。犯人以外の
研究員は全員死亡。

賞金：15000ゴールド

・人喰いピーグル
狂犬。飼い主の命令を聞かない。捨てられた。

賞金：8000ゴールド

・堕ちた天使
人を食うことを覚えてしまった天使。一度人の肉を食べた天使は
その味を忘れない。
光術系の魔法を使う。

賞金：24000ゴールド

「何か情報あったら、すぐに教えてくれよ」

「いいですよ。解りました」

「ただし、見つけても絶対に手を出すなよ……特にキラーマシンと魔女はな。殺されるのがオチだぜ」

言われなくてもわかっていた、僕のレベルで勝てる相手じゃない。キラーマシンや魔女と言わず、どれと戦っても一瞬で負ける自信がある。

・研究所

+++

「チクシヨウ……。ロクな仕事が無かったぜ」

やはり職業安定所に行ってもたいした仕事が見つからなかった。保証人がいない人間には、まっとうな仕事がないらしい。

唯一あつたのは『研究所での実験お手伝い』のみ。

仕事の説明が書いてあるパンフレットには、
短時間で高収入を目指す人集まれ。

保証人不要。

年齢、経験不問。

給料即日払い。

資格必要なし。

くわしい実験内容は、集合場所で説明させていただきます。

やる気がある人を募集しています。

なんてことが書いてあつた。

この募集内容から察することができる。

要するに誰でもいいってことだろ。

「すげえ怪しい」

何をさせられるのだろう。

研究所での実験と言うからには、

怪しいクスリを飲ませるのだろうか。
それとも怪しい人体実験が行われるのだろうか。

怖い。すげえ怖いけどやるしかない。でもまあ、とりあえず行ってみて駄目そうだったら帰ってこよう。

その時の僕の考えは、そんな感じだった。
でも、この時の甘い考えのせいでもんでもない事件に巻き込まれることになるのだ。

仕事するための研究所に着くと、そこには結構な人数が集まっていた。

筋肉ムキムキで、体中に傷がある戦士。

老齢の魔術師。杖は相当使い込まれている。

この地域ではあまり見ることがない魔獣使이었다。

使役している魔獣は、

【八愛】猫を大きくしたような魔獣。強力な牙で相手を噛み砕く。人なっつこい。

【一角】人間に成り損ねたサルの成れ果て、鼻の所にある角で敵を貫く。

【波紋】詳しい能力は知らない。
見るからに歴戦の猛者だ。

しかも、そんな連中ばかりではない。

どう見てもズブの素人のような冒険者も結構いる。2〜30人と
いった所だろうか。

装備してるモノがお粗末だ。

ほとんど使ったことがないような、真新しい剣や鎧を装備してい
る。

おそらく短期間、高収入という内容に惹かれて来たんだろう。
もちろん僕もその中の一人であることは言うまでもない。

・研究所でのアルバイト！

+++

「この研究所での仕事を始めてもらう前に説明があります」
そう言ったのは、見た目が若い女性だった。

少しだけ笹のような形の耳から察するに、エルフの血を引いているのだろう。

正確な寿命はわからない。

エルフ族の寿命は、あきれほど長い。

例えわずかながらでも、エルフの血が混じっていれば相当長く生きることができる。

「実験を始める前に、みな様にはこの待合室で順番待ちをしていただきます」

今いるこの部屋は相当広い 待合室っていうより、運動場、もしくは闘技場といったほうが相応しい感じだ。

場所は地下一階にある。遙か上にある天窓から光が入ってくるため暗くはない。

耳の上がった女性の話す内容は決まっているのであろう。
手にあるメモ紙を見て淡々と説明をはじめた。

「今から番号札を配ります。それは無くさないようにしてく

ださい。

説明する内容は、簡単なモノです。

実験が始まったら、この部屋からスタッフはいなくなります。

我々スタッフは全員、研究で手が離せなくなるためこの部屋にいることはできないからです。

実験が始まったら、研究所の機密情報の管理関係上、みな様はこの部屋から出ることができなくなります。

私はこの部屋から退出しますが、その時に外側から鍵をかけさせていただきます。

その鍵は実験終了後に解除されますので、トイレなどは今のうちに行っておいて下さい。

誰か生きたい人はいますか？

誰もいないようですね。

行われる実験は3段階ほどありますので、皆さんにやっていただくコトはそのつど説明いたします」

以上が説明の内容。

「なにか質問はありますか？」

耳のとがった女性がそう言うと、僕の隣にいた男が質問をする。

「今からこの仕事をやめたいと言ったら、それは可能なのかね？」

先ほど、この研究所の入り口で見かけた老魔術師だ。

「ええ、かまいませんよ。ただし、この部屋には残っていただきます。実験には協力せずこの部屋の椅子にかけてお待ちください。すべての実験終了後に依頼キャンセルの手続きをとらせて頂きます」

質問はそれだけだった。

そして、実験は始まる。

「これはハメられたかもしれんのお」
僕の隣にいた、老魔術師が言った独り言が聞こえてきた。

・研究所でのアルバイト！！

++++

やがて、耳の長い女が部屋から退出すると鍵がかけられた。これで実験が終わるまで誰も外に出ることができない。

室内放送が流れた。

締め切られた部屋で、先程の耳の長い女の声が聞こえる。

「それでは実験を始めさせていただきます。まず皆さんは、部屋の奥から出現するマシンと戦っていただきます」
たったそれだけ言うとは放送は終わってしまった。

さつき老魔術師が言っていた言葉が気になっていた。
ちようど僕の隣に座っていたので質問をすることにする。

「なんですか。ハメられたって？」

「今にわかるじゃろ」

そっけない答えが返ってくる。

目の前から何か出てきた。先程アナウンスされた実験のための機械が出現する。

人間を模したマシンのようだ。

馬鹿でかい体は金属製の三角すいを逆にしたようなカタチをしており、そこから細長い手と足が生えている。

左手には、銃弾を連射できるガトリングガン。

右手には、とうてい人間には扱えないだろう、大型のサーベルが装備されていた。

人間に例えると顔に当たる部分には、簡単なカメラが付いている。継ぎ目の少ない流線型をベースにした無機質なデザインが不気味さを漂わせる。

装備されている武器から想像するに十中八九、戦闘用のマシンと
いうことで間違いないだろう。

「ん？何処かで見たことがあるな」

最近、見たような記憶があるのだが思い出せない。

僕はしばらく考えていると誰かの叫び声が聞こえた。

「うわああああ！賞金首リストのキラーマシンだ！！」

僕はその声を聞いてやっと思い出す。

道を聞いた自警団で見た賞金首リストの張り紙に載っていた賞金首。

【キラーマシン】が現れた。

キラーマシンは戦闘体勢をとっている。

左手のガトリングガンを構えた。

「ほらの」

老魔術師が言ったとおりだったるといった顔で僕に話しかけてくる。

「これはどういうことですかね？」

目の前で起きたことに思考が追いついていかない。

僕は何が起きているか理解できていなかった。

「閉め切られた部屋に賞金首がいる状況が作られた。最初の女の
言っていた実験というのは、このマシンの性能テストと言ったこと

るか……」

老魔術師がそう言い終わると、

「嘘は言ってませんよ。この実験が終われば皆さんはこの部屋から出られますし、お給金もお支払いします」

さっきの女の声が部屋のスピーカーから聞こえる。

「ただし生きてこの部屋から出てこれたらの話ですけど」

・研究所でのアルバイト!!!

+++

部屋の中は、混沌としていた。

戦闘体勢を取る者に、最初から勝てないと踏んで逃げ惑う者。

部屋から逃げるために入り口のドアを開けようとする奴もいたが、鍵がかけられた金属製の分厚い扉はビクともしなかった。

そんな逃げ惑う者達に向かって「キラーマシン」が左手のガトリングガンで攻撃する。

炎撃の銃弾で攻撃。

入り口付近にいた男に、全弾命中。

攻撃を受けた男はダメージを受けた後に炎上。

消し炭なつて死んでしまった。

それを見た多くの人間は、後ずさる。

たった一度、今の攻撃を見ただけで攻撃力の違いが解った。

それほどまでに圧倒的。高額賞金首である【キラーマシン】の戦闘力は異常だった。

『戦ったら殺されるのがオチ』

自警団の人に言われたことは間違いではなかった。

部屋に絶望に似た雰囲気の流れ始める。

その中で勇敢にも戦いを挑む者もいる。

いくつもの厳しい戦闘をこなしてきた、戦闘のプロ。

体中に傷がある戦士と魔獣使いが戦闘態勢に入る。
老魔術師は、まだ戦闘に参加する気配はない。様子を見ているの
だろう。

正直な所、僕は賞金稼ぎではない。ここは専門家に任せるとしよう

魔獣使いは使役している【八愛】【一角】【波紋】を放った。

【キラーマシン】にいつせいに襲い掛かる。
しかし、全くダメージを与えられない。

【一角】は角が根元から折れてしまい戦闘不能。

【キラーマシン】は雷撃の銃弾を放った。

左手に装備されたガトリングガンから、雷撃の特性を持った銃弾
が無数に発射される。

【八愛】に命中。死んでしまった。

銃弾だけで死んでしまった【八愛】の死体に電撃の魔法が発動。
バリバリといった激しい音と共に、死体は消し炭になり無くなって
しまった。

【波紋】がキラーマシンに襲い掛かる。体にへばりつき自爆した。
強烈な衝撃波と炎がキラーマシンを襲う。

爆風が部屋全体に吹き荒れる。

キラーマシンは、鉄でできたボディが少し歪んだ。

魔獣は全部死んでしまった。

使役している魔獣が全滅してしまった魔獣使いは、逃げようとし
ている。

【キラーマシン】は、右手のサーベルで魔獣使いを攻撃した。
魔獣使いは、真っ二つに切り裂かれられ死んでしまった。

それを見ていた老魔術師は、

「コレはまずいのう」と話す。

「そんなこと言われなくてもわかってますよ！」

見れば解る。強力な魔獣を使役している人間が一瞬で殺されたのだ。

残った奴ら全員で戦っても勝てる可能性は少ないだろう。

・研究所でのアルバイト!!!!!!

+++++

部屋の残り人数は、後半分といったところだろうか……。
ずいぶん減ってしまった。

【キラーマシン】に戦闘を挑んでいった冒険者はみんな死んでしまった。

僕が殺されるのも時間の問題だ。

「おまえさん。ワシに協力するんなら助けてやるぞ」
老魔術師に話しかけられる。

「なにか作戦があるんですか？」

喜んで協力しよう。

どうせこのまま手をこまねていてもゲームオーバーなるだけだ。

「お前をワシが使う転送の魔法でこの部屋から出してやる」
転移魔法。人の体を離れた場所に転送する。

高度な魔法技術が要求されるため、使える人間は一握りだけ。

転送できる距離は、術者の能力に比例する。

「おお、使える人間始めてみた。すごいなジイさん」

そんな便利な魔法が使えるんだったら、この閉ざされた部屋から脱出できる。

「しかし、条件がある」

「なんだよ」

悠長に話してる暇はない。いつ敵に襲われるか解らないのだ。

「実はワシの魔法なんじゃが……。自分以外の一人だけしか転送できない。魔力の関係から使えるのは一回だけ、そして距離は3メートルほど」

「短い距離でも、この部屋から出られればいいけど……」

例え僕がこの部屋から出れても、中に残ってる奴は逃げられない。みんなキラーマシンに殺されてしまうだろう。

「それでこの部屋から出て、やってもらいことがある」

「なにをやればいい？」

老魔術師は頷いて話した。

「あそこで暴れている【キラーマシン】、おそらく部屋の外に操ってる奴がいる」

「そうなの？」

「ウム。あれはモンスターじゃない。魔法で動く機械じゃ。だから単独で動くことはできない」

「そういうものなんだ」

僕は頷いて話を聞く。

「そして、操ってる奴なんじゃが　おそらく戦闘力は低いだろう」

「なるほど。だから僕たちを、この部屋に隔離したわけだ……」

「その通り。だからこの部屋から出た後にそいつを探し出して倒して欲しい」

「ジイさんは、誰が操っているのか心当たりあるのか？」

「わからん。じゃが、あれ程大きな機械を操っているのだから相当な集中力があるはず」

「とりあえず動きを鈍い奴を探せばいいか……」

「そうしてくれ。ここはおそらく、後10分もたないじゃろう。急いで行け」

「わかりました」

二人でやることを確認し終わると、老魔術師が魔法を唱え始める。僕は、詠唱に邪魔が入らないように辺りを見回す。高度な魔法には、とてつもない集中力がある。この魔法は失敗するわけにはいかないのだ。

しばらくして詠唱が終わると、僕の体はスライムのようなゲル状になってドアの隙間から出ることができた。

「なんか思つたのと違うな……」
魔法により体が光に包まれて移動するのかと思つたら、そうではなかった。

・アルバイト終了

外に出て一番最初にやることは、ドアが開閉できるかの有無である。

内側から開かなくても、外側からは開けられるかもしれない。けどそれは甘い考えだった。

この扉にはドアノブがない。どうやら魔法で開け閉めするタイプのようだ。

急がないと中にいる奴らがどんどん死んでいってしまう。

ドアはあきらめて、当初の予定通り【キラーマシン】を操っている敵を倒すことにした。

似たような扉に同じづくりの通路。

これでは自分が何処にいるか解らなくなる。

でもある程度目星はついている。

頭の中で最短ルートを計算し、そこに向かって全力で走った。

マシンを操っている術者は、無防備になる。

ということになるべく離れた場所に身を隠すのだろうか。

でも、あまり離れすぎると【キラーマシン】のコントロールができなくなるかもしれない。

あれだけゴツイ機械は、遠方から操るとなると相当厳しいだろう。

近くで身を守ることが出来る安全な場所
僕が今までいた部屋は地下一階だった。この建物の最下層の場所である。

ということは

おそらくこの場所にいるに違いない。

1階にある『ミーティングルーム』

ちよつと僕がさつき【キラーマシン】に殺されそうになっていた
部屋の真上に位置する場所。

さっきの部屋に一番近い。

でも階が違うから、この場所に来るまで時間がかかる。だから安全。

目的地に着くや否や、僕はそのドアを蹴破る。

予想通り人がいた。

僕らに実験の説明をしていた、エルフの血を引く耳の長い女だ。

「なんですかアナタは？」

「……まさかアンタが狂った科学者だったとはね。悪いけど時間がないから。サクッと殺らしてもらっせ」

僕はそれだけ話すと、腰にさしていた剣を抜き相手に突きつける。

「ちよつと待って下さい！キラーマシンを止めますから見逃してください！」

慌てふためく耳の長い女。

この反応。やはりこの女で間違いなかったようだ。

「ここからじゃあ、【キラーマシン】が停止しているかどうか確認できない……。しかもこの間にも人が死んでるかも知れない。だから駄目だ」

僕はそう話すと、耳の長い女に剣を突き立てる。

一撃でカタがついた。

老魔術師が予想していた通り、操っている奴は弱かったのだ。耳の長い女が倒れると、彼女の体からアイテムが落ちる。

>キラーマシンの腕輪<を手に入れた。

+ + +

けれど一足遅かったようだ。

急いで一番最初にいた部屋に戻ったが全員死亡していた。

・アルバイト終了 その後

+++

僕の命の恩人の老魔術師。

助けられなかった。亡骸は土に埋め、墓標の代わりに魔術師が使っていた杖を立てる。

「助けられなくて、すまなかったなジイさん……」

歩きながら考えた。

イロイロなことを

これからの生活、戦い、人生。でも考えるだけだ。いつもどおりだ。

「まずは、自警団に賞金首を倒した報告をしないと」

賞金首を倒したことなどないのでどういった手続きをすればいいのか勝手がわからない。

まあ、行けばなんとかなるか。そんなことを考えていた。

> キラーマシンの腕輪<を装備した。

手に入れたアイテムはまず使ってみないといけない。

「僕に使うことができるのか」

エルフが使っていたアイテムだ。魔法が使えないと作動しないのかもしれない。

試しに今度の戦闘で使ってみよう。

しばらく歩くと町に着いた。なんとか無事に帰ってくることにできた。

まずは、自警団の建物へ行く。

そこで賞金首討伐完了の手続きをする。書類に住所と名前、年齢。そして、賞金首を倒した経緯を書かされた。

その後に簡単な、口頭での聞き取りが行われ終了。

後日、現場検証と死体の本人確認が完了したら賞金を受け取るこ
とができるらしい。

だいたい一週間ですむとのこと。

「そんなにかかるのかよ。もう5ゴールドしかもってねえよ」
最初の予定だと、即日で給料がもらえるはずだったのだ。

今日、お金が入ると思ってたのに……。

途中から賞金首討伐のミッションになってしまったのは予定外だ
った。

けどそんな文句言っただけでも仕方ない。

「まあ、いいや。あの状態で生き残れただけでもめっけもんだ」

今日のところは大人しく家に帰って、有る物で飢えをしのごう。
そしてぐっすり寝よう。

すげえ、疲れた。

家に帰り、部屋に入ろうとすると大家さんに声をかけられた。

「アンタ、ずいぶん帰ってくるの遅いじゃない。何してたんだい
？」

(しまった……。今一番会ってはいけない人物に遭遇した)

「いやあ、ちょっと野暮用で……」

「そうかい、まあそんなことはどうでもいいんだけどさ。滞納してる家賃は何時払ってくれるのかね？」

言われると思った。最近顔を合わせるたびに聞かれる。

なんて金の取立てにきびしいババアだ。

まあ、2ヶ月も家賃を滞納してれば当然のことなんだろうけど。

「あゝ、ごめんなさい。2週間後には間違いなく払いますんで、もうチョット待ってもらっていいですか」

「何言ってるんだい。そんなの信用できないね！何度同じセリフを聞いたことか」

「そこをなんとかお願いします」

手を合わせてお願いすると大家さんは、

「一週間だけ待ってやる。それ以上遅れたら今度こそ出て行ってもらうよー！」

と吐き捨てるように言うのと家に帰っていった。

「ふーッ。やっぱりお金払う期日。長めに言っておいて良かった」
あのババアの考えなんてお見通しだぜ。

そのまま、自分の部屋に入ると一息つく。

「ノドがかわいたな」

そう独り言を言いながら水道の蛇口をひねる。

何も出てこない。

そつだ、水を止められていたんだつた……。

僕は、だいぶ前から水道料金も払っていなかった。

・トルとの戦い

+++

「スライムって食えるのかな」

そんなことを考えていた。あまりにも腹が減りすぎていたために、家にある食料は全部食べてしまった。

水は公園でなんとかなるから大丈夫だ。

残り少ない手持ちの金で買えるものなんて町になかった。

隣に住んでいる人に言っつて何か食べられる物を分けてもらおうか

……。

でも、朝会った時に挨拶するぐらいの面識しかないのに、いきなりそんなこと言っつたら変な奴だと思われるよな。

そんなことはできない。

賞金の受け取りまで、後6日。

なんとなく町の外に出ることにした。

ここから先はモンスターが出る。

スライムが食べられるかどうか実際に試してみようと思ったのだ。それが駄目だったら、そこら辺に生えている雑草を採って食べてみよう。

しばらく歩いていると、ここら辺で一番メジャーなモンスターに出くわした。

狙いどおりだ。

ブルーの半透明で、ドロドロとしたゲル状の体の特徴のモンスター

！。

スライムが現れた。

僕は腰にさしてあった剣を抜き、スライムに斬りかかった。

スライムにダメージをあたえる。

スライムの反撃。

弾力性のある体で体当たりしてきた。

僕は吹っ飛ばされて地面を転がる。

「いつてええ！」

結構なダメージだ。

世界で一番弱いモンスターなのに大苦戦だ！

体勢を立て直してもう一度、斬りかかる。

スライムに剣を避けられた。

スライムは、体をムチのようにしならせて攻撃してきた。

急所に入った、鈍い音がする。大ダメージ！

僕はスライムの攻撃の反動で地面に叩きつけられた。

当たり所が悪かったんだろう。

口から血が出る。

「ヤバい……。内臓がやられてたら重症だ」

僕は逃げ出した。

「情けねえ……」

スライムにさえ勝てないのか。

いや、きつと腹が減っていたせいだ。

間違いない。

そつに決まってる。

そつであって欲しい。

ダメージを受けた所を確認したけど、大丈夫なようだ。
血が出たのは、口を切っただけだろう。

「ハア〜」

大きなため息をつく

「キヤ

!!!」

女性の悲鳴が聞こえてきた。
声のするほうに駆け寄る

すると少女がモンスターに襲われてる。

人間の大人の5倍はあるだろう大きさ、緑色の醜い体。
手には巨大な棍棒。

「トロールかよッ!？」

何でこんな所にいるんだよ。

比較的安全なここら一帯の地域には出現しないはずのモンスター。
腹をすかせて山から降りてきたのだろうか。
なにせよスライムに歯が立たない人間では倒せるわけもない。

トロールが現れた。

トロールは少女に向かって棍棒を振りかざす。

「あぶねえッ!」

そう叫ぶと僕は、その場にタツクルするような体勢で飛び込み、
少女の体を抱えて敵の攻撃をかわす。

棍棒の強力な一撃ですさまじい轟音と共に 地面が砕けた。
大きな穴が開く。

意表を付かれたトルルは攻撃をミスした。

トルルは体勢を整えている。

どうしようあんな攻撃食らったら一撃で終了だ。

僕の人生が。

少女と一緒にいるので戦闘から逃げることもできない。

・エルフの少女

+++

少女は真っ白いワンピースの上に、同じ色のコートを着ている。袖とスカート、そしてフードの部分に赤い文字の紋様が描かれていた。

高度な魔術文字を意味するものだ。

きつとんでもない値段がする高級品の服だ。

僕はそんなどうでもいいことを、戦闘中に考えていた。

「大丈夫か？」

少女に声をかける。

「はい、なんとか」

避ける際、何処かに頭をうつたのだろう。

頭を左右にフルフル振っていた。

だが今はそんなことを気にしている場合じゃない。

「逃げられるか？」

他の選択はない。

少女にそう尋ねると、

「ごめんなさい。足をくじいたみたいで……動けません」と答えた。

「マジかよ」

「私を置いて逃げてください、あとは自分でなんとかしますから死ぬつもりだ。」

おそらく冒険者だろう。死に際を心得ている。

「そんなことできるかよ」
「言いながらもトルルはどうすることもできない。
どうしよう。」

「では私が呪文を唱えている間、時間を稼いでもらっていいですか」

「わかった！」

無理無理無理無理。

いきおいで返事しちゃったけど絶対無理。

無理だけどそれしか選択肢は無い。

彼女にはトルルに対向出来る魔法があるのだろう。

彼女の方を見ると、すでに詠唱に入っている。

もう移動はできない。

どうしよう、どうしよう、どうしよう、どうしよう。

棍棒を受け止めたら僕が死亡。

棍棒を避けたら少女が死亡。

どちらにしても死人が出る。

そうだ、まだ使ったことないけど……

>キラーマシンの腕輪くを使った。

地面には光の魔術文字で描かれた魔方陣が現れた。

それに光が集まり【キラーマシン】が実体化。

キラーマシンが戦闘に参加する。

トルルはキラーマシンに向けて強烈な一撃を放った。

棍棒がキラーマシンにヒット。

ノーダメージ。

【キラーマシン】は戦闘態勢に入っている。

- ・使える武器は右手のサーベル。
- ・左手に魔法の弾丸を連射できるガトリングガン
- > 雷撃の弾丸<
- > 氷撃の弾丸<
- > 炎撃の弾丸<
- ・特殊能力：> 自爆<

僕は右手のサーベルを選択した。

キラーマシンはトルルに襲い掛かった。

右手のサーベルで切りつける。

グチャリ という鈍い音がした。

トルルは頭は剣圧によって潰されてつぶれ、体は真っ二つになって倒れる。

モンスターを倒した。

「うわぁ……。エグい」

僕の目の前にいたトルルは、グチャグチャの真っ二つになって死んだ。

キレイに分断されているのではなく、力任せに切り裂かれた感じ
で。

「ありがとうございます。私の魔法は必要ありませんでしたね」
助けた少女に笑顔で話しかけられた。

「いやいや、……。まあね。怪我はない？」

自分が使った【キラーマシン】の威力に自分でドン引きしながら
答える。

「たいしたことはありません。大丈夫です」

さっきは戦闘中でバタバタしていたから気づかなかったけど、少女は笹のようなカタチの耳をしている。

先程の戦闘で詠唱していたスペルは黒魔法の一種……。

エルフの魔法使い。

でもおかしい。そんなエルフが存在できるのだろうか。

森の守護者であるエルフ族が使う魔法は、黒魔術ではなく精霊なのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2565z/>

理由がない悪意のクエスト。

2011年12月11日18時53分発行